愛鷹山麓の後期古墳を考える

滝沢　誠

1　愛鷹山麓の古墳

富士山の南側に位置する愛鷹山の南麓には、中小の河川によって開析された深い谷とそれらによって隔てられた尾根が樹枝状に発達している。その眼下に広がる駿河湾の沿岸には、富士川や狩野川の砂礫を供給源として形成された田子の浦砂丘が東西約22km にわたって弧を描くように延びている。この愛鷹山麓と田子の浦砂丘に挟まれた東西約 15km の浮島ヶ原低地は、昭和の干拓事業によって完全に陸化するまで、現在の田子の浦港付近で駿河湾と接続する内水面（＝浮島沼）を形成していた。

こうした地形的環境にある愛鷹山麓には、6 世紀の終わりから 7 世紀にかけて数多くの古墳が営まれ、その数は 1,000 基を超えるとみられている。なかでも、富士市須津古墳群、同船津古墳群、沼津市石川古墳群はそれぞれ 200 基前後の古墳からなり、この一帯を代表する古墳群となっている。これまでの発掘調査によれば、それらを構成する古墳のほとんどは直径 10 m前後の小規模な円墳で、横穴式石室を埋葬施設としている。まさに、古墳時代後期に特徴的な群集墳の姿そのものと言えよう。

じつは、これほど多くの古墳が密集している場所は、静岡県内はもちろんのこと、東日本全体を見渡してみても数少ない。ここでは、そうした古墳密集地帯が成立した背景を探る手がかりとして、①集落と古墳群の関係、②馬具副葬古墳の分布、③特徴的な籠手の副葬に着目し、愛鷹山麓における後期古墳の特質に迫ってみたい。

2　山麓の古墳と海辺の集落

愛鷹山麓は、標高 100 ～ 200 m付近を中心に後期旧石器時代の遺跡が数多く分布することでもよく知られている。つづく縄文時代にも同様の立地をとる遺跡が点在し、湖沼に面した南向きの緩斜面が狩猟や採集、漁撈を生業とした人々にとって好都合な場所であったことがうかがえる。

この一帯における水田稲作は弥生時代中期中葉に始まるが、集落の数が増加するのは弥生時代後期からである。尾根の先端に立地する沼津市目黒身遺跡や低地内の微高地に立地する同雌鹿塚遺跡は後期前半を代表する集落で、生産基盤となる低地に隣接し、雌鹿塚遺跡では多数の木製農具が出土している。

つづく弥生時代後期後半になると様相は一変し、集落は愛鷹山麓東部の標高 100 ～ 150 m付近に集中的に営まれるようになる。植出遺跡や八兵衛洞遺跡を含む足高尾上遺跡群がそれで、遺跡群の北側には尾根や谷を東西に貫いて掘られた 1km 以上に及ぶ溝の存在が確認されている。このような高地に密集度の高い大規模な集落が成立する要因については様々な見方があるが、比較的短期間にそれが認められる点からすれば、何らかの社会的インパクトによるものとみるのが妥当であろう。

古墳時代前期になると、集落は再び尾根の先端部や低地部に営まれるようになる。なかでも、富士市祢宜ノ前遺跡や同宮添遺跡のように浮島ヶ原低地の周囲に立地する集落がみられるようになる点は、富士市沖田遺跡で発見された準構造船の存在ともあわせて、浮島沼の内水面を利用した水上交通の発達をうかがわせるものである。ところが、それらの集落の多くは中期になると忽然と姿を消してしまう。その要因としては、河川の氾濫や大規模地震による地盤の変化、富士山の噴火に伴う降灰といった自然災害の影響が指摘されている（藤村 2017）。

古墳時代後期の集落は、再び浮島ヶ原低地の周囲に営まれるようになる。とくに、愛鷹山麓に多数の古墳が築かれる後期後半以降の集落は、田子の浦砂丘上に列状に分布している点に大きな特徴がある。富士市三新田遺跡、沼津市中原遺跡、同東畑毛遺跡などが代表例であり、古墳造営の最盛期と重なるように、それらの多くは 7 世紀前半に集落形成を開始している（木村 2016）。これらの事実をふまえるならば、愛鷹山麓に多数の古墳を営んだ集団の主な居住域は、浮島沼を挟んで対岸に位置する田子の浦砂丘上に求めるのが妥当であろう。集落と古墳群の具体的な対応関係については個別に検討が必要であるが、例えば、大規模古墳群の一つである石川古墳群を造営した集団は、その対岸に位置する中原遺跡に

集落を形成していた可能性が考えられる。

以上のように、古墳時代後期になって砂丘上に居住域を定めたいくつかの集団は、北側に広がる生産域（浮島沼と周囲の低地部）とさらにその北側につづく墓域（愛鷹山麓）という南北方向の細長い範囲を個々のテリトリーとしていたことが想定される。愛鷹山麓の後期古墳を理解するにあたっては、こうした景観的特徴をまずは把握しておく必要があろう。

3　馬具副葬古墳と陸上交通

愛鷹山麓における群集墳の特徴として、鉄製馬具を副葬した古墳の多さを指摘することができる。もちろん古墳数自体が多いため、絶対数のみで単純な評価はできないが、一定数の古墳が確認されている伊豆半島海岸部に馬具の副葬がほとんどみられない点からすれば、愛鷹山麓に群集墳を営んだ集団と馬との深いかかわりは認めてよいだろう。

馬具副葬古墳は、6 世紀に入ると各地で増加していくが、日本列島全体でみると、いくつかの集中域が認められる。西日本では福岡県域に数多くの分布がみられ、東日本では群馬県域を最多として、長野県域や静岡県域にも多数の分布が認められる。そして、それらの馬具副葬古墳は常に一定の分布状態を示しているわけではなく、年代の推移とともに分布状態に変化が生じることが知られている。

図 1・2 は、東海・中部地方から関東地方にかけての馬具副葬古墳（5 世紀後半～ 7 世紀）の分布を年代別に示したものである。あくまでも現状の調査データにもとづく分布図であるが、先述の伊豆半島と同様に、現在の霞ケ浦よりもはるかに広大な水域が広がっていた茨城県南部における馬具副葬古墳の少なさが目に付く。同地域における古墳調査例はけっして少なくないことから、こうした事実は、副葬品として馬具の選択に現実世界での馬利用の多寡が関係していたことを示唆している。つまり、水上交通とのかかわりが深い伊豆半島や茨城県南部などでは馬の利用が低調であったと想定される一方で、馬具副葬古墳が集中する地域では陸上交通と馬とのかかわりが検討の視野に入ってくるのである。

そこで、愛鷹山麓を含む静岡県東部に目を向けてみると、5 世紀後半（須恵器編年 TK208 ～ TK47 式期）～ 6 世紀前半（MT15 ～ TK10 式期）の馬具副葬古墳はきわめて乏しく、わずかな事例が北伊豆に知られているのみである。ところが 6 世紀後半（TK43 ～ TK209 式期）～ 7 世紀（TK217 ～ TK48 式期）になると、一気にその数は増加に転じる。愛鷹山麓における群集墳の盛行と軌を一にする現象と言えるが、じつは県域全体でみると、5 世紀後半～ 6 世紀前半の馬具副葬古墳は西部（遠江）に数多く分布し、6 世紀後半～ 7 世紀になると、愛鷹山麓を含む東駿河や北伊豆での事例が増加するという顕著な変化が認められる。

そうした分布の変化は、静岡県域以外でも確認することができる。よく知られているように、長野県域では、5 世紀後半から 6 世紀前半にかけての馬具副葬古墳が南信（伊那谷）に集中するのに対し、6 世紀後半を経て 7 世紀に入ると、東信（佐久平）に分布の中心が移動する。群馬県域では、6 世紀後半～ 7 世紀に西毛で馬具副葬古墳が増加し、7 世紀には北部の山間部に馬具副葬古墳の分布が拡大する。同様の動きは神奈川県域でも認められ、そこでは 6 世紀前半までの散在的なあり方から転じ、6 世紀後半～ 7 世紀の馬具副葬古墳は西相模に遍在するようになる（東北・関東前方後円墳研究会編 2017）。

こうした変化の背景をめぐっては、房総半島の馬具副葬古墳が古代の東海道ルート（東京湾東岸～印旛沼東岸）に沿うかたちで線状に分布している点などに着目し、古墳時代後期には馬を利用した交通路の整備が進んだとする見解が示されている（松尾 2002）。そうした視点に立つと、ほぼ軌を一にして東駿河・北伊豆と西相模に馬具副葬古墳が増加する現象の背景としては、峠越えの陸上交通路とのかかわりを検討する余地があると思われる。また、同様の視点から、東信と西毛における馬具副葬古墳のあり方や、群馬県北部の山間部に馬具副葬古墳が増加する現象も理解できるかもしれない。さらに、その点で言えば、7 世紀に入って北伊豆で馬具副葬古墳（横穴墓）が急増する現象も大いに注目しておく必要があろう。

以上のように、愛鷹山麓に馬具副葬古墳が多くみられる現象については、馬を利用した陸上交通の発達という側面から理解することが可能と思われる。

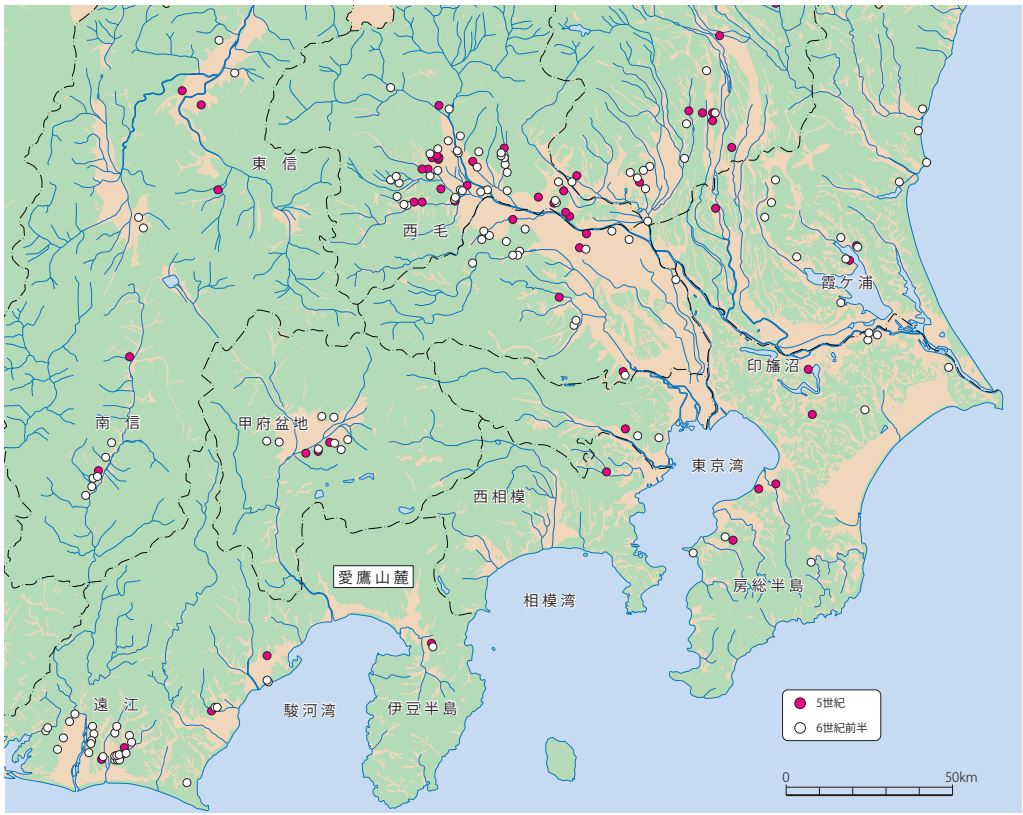

図１　馬具副葬古墳の分布：５世紀～６世紀前半

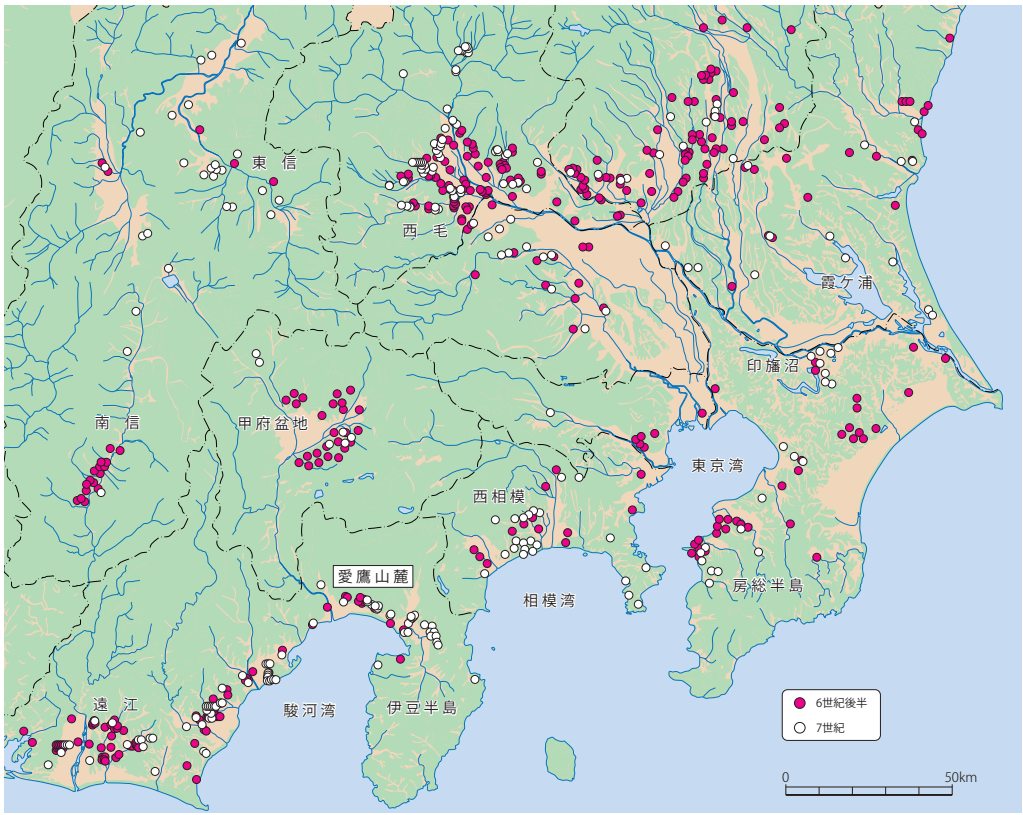

図２　馬具副葬古墳の分布：６世紀後半～７世紀

それが、人や情報の移動、物資の運搬のみならず、軍事にも資するものであったことは想像に難くない。

加えて、愛鷹山麓一帯では、複数組の馬具を副葬した古墳が存在することから、馬匹生産がおこなわれていた可能性が指摘されている（大谷 2016）。その一角には平安時代に岡野牧が設置されており、伊那谷と同様に深い谷によって隔てられた緩斜面が馬の生産と管理に好都合であったことは確かであろう。

東駿河から北伊豆にかけての地域は、関東平野への入り口となる水陸交通の要衝であるが、愛鷹山麓に多くの古墳が営まれた 6 世紀末から 7 世紀にかけては、陸上交通の発達に一層の進展があったとみられる。その具体的なルートは、当該期の集落が列状に分布する田子の浦砂丘上に求められ、それが古代東海道の原型になったと考えられる。愛鷹山麓における群集墳の展開は、馬の生産に適した地形的環境と東西を結ぶ陸上交通の要衝という地理的環境を抜きにして語ることはできない。

4　特徴的な籠手の副葬

馬具副葬古墳のあり方からうかがえる東西方向の結びつきとは別に、愛鷹山麓の後期古墳を考える際に見逃せないのは、南北方向の結びつきである。

愛鷹山麓とその西側にあたる富士山麓の地域は、富士川ルートを介して歴史的に甲府盆地との結びつきが強い。群集墳が盛行する古墳時代後期においても、東駿河で主流となる特徴的な無袖の横穴式石室が甲府盆地にも分布しているという事実がある。そうした関係を補強する材料として、ここでは特徴的な鉄製籠手の副葬について取り上げてみたい。

言うまでもなく鉄製籠手は下腕部を保護する甲冑の付属具であり、甲冑本体と時を同じくして古墳時代前期から古墳への副葬が認められる。ただし、全国で 900 箇所程度を数える甲冑副葬古墳の総数に比べてその数は少なく、これまでの確認例は、可能性のあるものを含めても 40 例程度にとどまっている。それらは形態的特徴によって、篠籠手、筒籠手、板籠手に大別されるが、ほとんどの事例は、細長い篠状の小札を横方向に綴じ付けて下腕部を一周させるかたちの篠籠手である。

愛鷹山麓では、古墳時代をつうじても数少ない鉄製籠手が、沼津市石川 119 号墳と富士市船津 L-212 号墳から出土している（図 3 － 1・2）。いずれも 6 世紀末～ 7 世紀前半の篠籠手で、手の甲を覆う部分（手甲）と本体を構成する長さ 20 ～ 23 ㎝ほどの篠札が出土している。本来両腕で一双をなす籠手の片方が副葬されていた可能性があり、小札甲の破片が一切出土していないことも注目される。

じつは、愛鷹山麓の事例とほぼ同時期に副葬されたとみられる鉄製篠籠手の類例が甲府盆地内に 3 例知られている。甲府市考古博物館構内古墳、同稲荷塚古墳、笛吹市平林 2 号墳からそれぞれ出土したもので、前二者では複数の存在が確認できる（図 3 － 3 ～ 5）。また、いずれの古墳でも小札甲の存在を示す明確な破片は出土していない。

愛鷹山麓と甲府盆地の籠手副葬古墳には、両腕副葬と片腕副葬の二者があるとみられ、篠札の頭部形状による構造上の差異も指摘できるが、5 例とも小札甲の副葬を認めることができず、籠手のみを副葬した事例である可能性が高い。籠手のみを副葬した事例は、鉄製甲冑が出現して間もない古墳時代前期にもわずかに認められるが、前期には冑のみ、あるいは甲のみを副葬した事例がほとんどで、鉄製甲冑そのものの流通量が限られる中で象徴的な部分副葬がおこなわれた可能性が考えられる。一方、小札甲が数多く生産され、一定の流通量が確保されている中での籠手の副葬は、そこに何らかの特殊事情が介在していたことを疑わざるを得ない。管見による限り、7 世紀代の籠手副葬古墳が上記 5 例のみであることも、その特異性を際立たせている。

6 世紀から 7 世紀にかけての鉄製甲冑は、前方後円墳などの有力者クラスの古墳や、群集墳の中でも中核となる古墳から出土することが多い。上記 5 例の中には、金銅装馬具（考古博物館構内、稲荷塚、平林 2 号）や金銅装大刀（石川 119 号）を出土した事例が認められることから、後者に列せられる可能性があるものの、いずれも墳丘規模は 10 ～ 15 m程度とけっして大きくはない。

これらの古墳は、無袖の横穴式石室を埋葬施設とする点でも共通しており、籠手のみを副葬するというきわめて特殊な埋葬行為の背後には、共通の活動

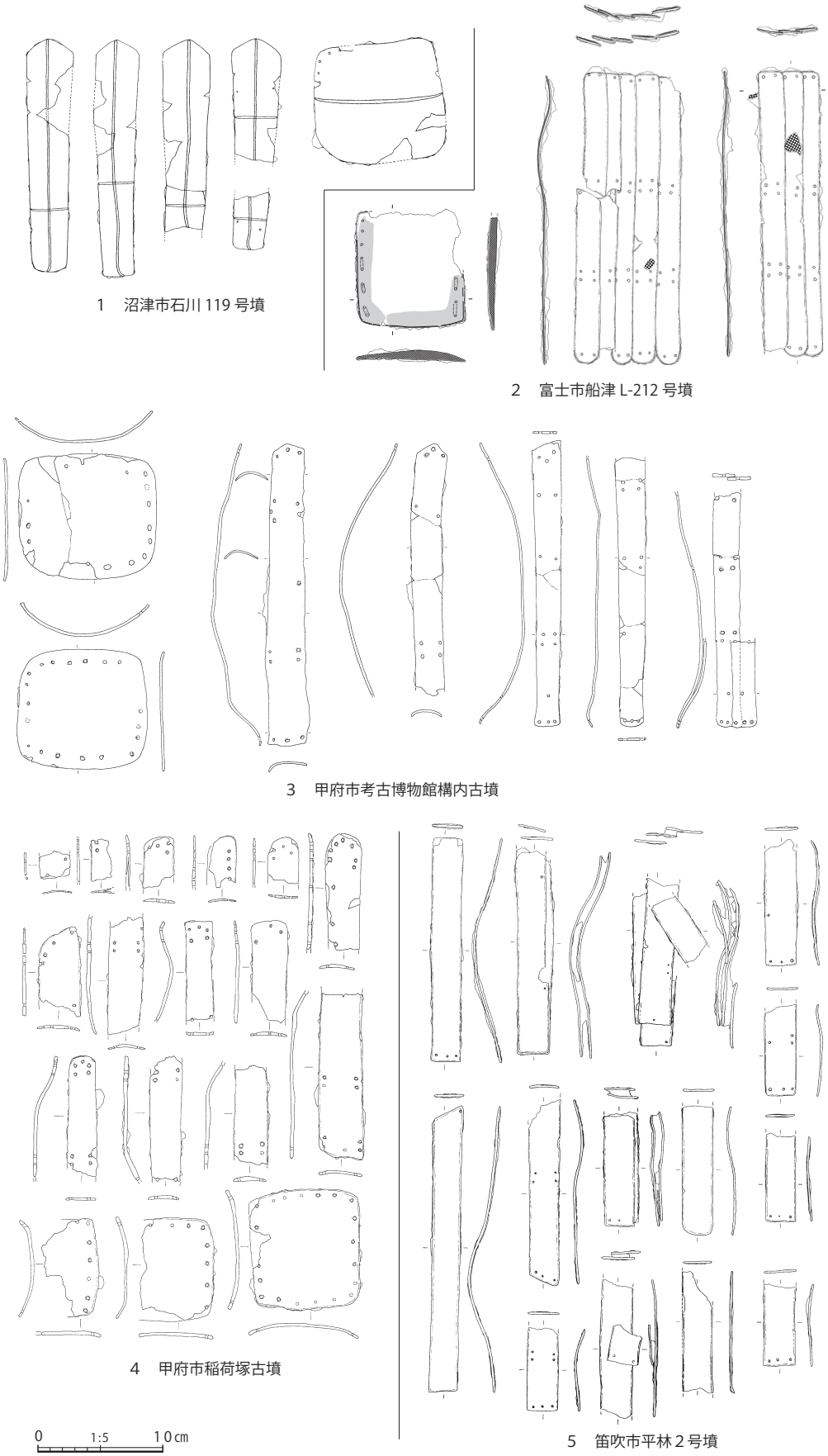

図 3　副葬された鉄製籠手（1/5）

基盤が存在していた可能性が高い。想像を逞しくするならば、甲冑の一部（籠手）を死後に象徴的に副葬するという埋葬規範を、何らかの活動をともにする中で共有するに至ったケースが考えられよう。

これまで十分に検討されてこなかった特徴的な籠手の副葬は、無袖の横穴式石室などとともに、愛鷹山麓と甲府盆地の強い結びつきを示すものである。そこには、南北交流にも軸足を置いた愛鷹山麓における後期古墳造営集団の特質を垣間見ることができる。

5　結節点としての愛鷹山麓

同時期に営まれた集落のあり方から、愛鷹山麓に多数の古墳を築いた集団の居住域は田子の浦砂丘上に求められ、それらの集団は浮島沼を間に挟んで砂丘から山麓に及ぶ活動領域をもっていたと想定される。また、6 世紀後半～ 7 世紀における馬具副葬古墳のあり方は、馬を利用した陸上交通の発達と愛鷹山麓の地形的環境を生かした馬匹生産地としての性格をうかがわせる。加えて、特徴的な籠手の副葬からは、横穴式石室の共通性によって指摘されてきた愛鷹山麓と甲府盆地の強い結びつきをより個別的なレベルで確認することができる。

以上の検討結果をつうじて浮かび上がるのは、東西交通及び南北交通の結節点（ハブ）としての愛鷹山麓の姿である。とりわけ数多くの古墳が営まれた 6 世紀末～ 7 世紀の動きに焦点を当てるならば、そこには馬を利用した陸上交通の発達という広域に及ぶムーブメントがあり、馬匹生産にも適したこの地域の重要性をいっそう高めたものと推測される。

ただし、忘れてならないのは、愛鷹山麓の眼下に広がる駿河湾の存在であり、依然としてこの地域では海上交通も重要な役割を果たしていたとみられる点である。奈良時代以降の遺跡のあり方から、富士川を越えてしばらく山麓側を東進する古代東海道は、浮島沼の西側で進路を南に向け、その後は田子の浦砂丘上を東進するルートが想定されている。それは、現在の田子の浦港付近に想定される「ミナト」を経由していくルートとみられ、古墳時代後期後半の主な集落が山麓沿い（後の根方街道沿い）ではなく、田子の浦砂丘上に並ぶ現象は、その原型が少なくとも古墳時代後期後半に遡ることを示している。

こうした見方をふまえるならば、愛鷹山麓に数多くの古墳を営んだ集団は、陸上交通の発達に寄与するだけでなく、海上交通との接続にも関与した集団であったと考えられる。富士市中原 4 号墳の副葬品が示すような先進的な手工業生産の展開も、そうした交通条件に支えられたものなのであろう。

ここでは、三つの視点から愛鷹山麓に多数の後期古墳が営まれた背景を探ってみた。もとより全体像を把握するには不十分であり、今後さらに多角的かつ詳細な検討をつうじて、愛鷹山麓における後期古墳の特質が総合的に解明されることを期待したい。

参考文献

大谷 宏治　2016「中原 4 号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法中原古墳群』富士市教育委員会

加藤学園考古学研究所　1976『駿河石川古墳群第三次発掘調査報告書』

木村 聡　2016「調査の成果」『中原遺跡発掘調査報告書第 3 分冊』沼津市教育委員会

塩入 秀敏　1993「長野県の馬具副葬古墳について―科野古代馬匹文化研究のための一作業―」『上田女子短期大学紀要』16

末木 健　2005「甲斐の馬と馬飼」『牧と考古学―馬をめぐる諸問題―』山梨県考古学協会

東海古墳文化研究会編　2006『東海の馬具と飾大刀』

東北・関東前方後円墳研究会編　2017『馬具副葬古墳の諸問題』第 22 回東北・関東前方後円墳研究会大会

富士市教育委員会　1999『船津古墳群』

富士市教育委員会　2013『船津古墳群 II』

藤村 翔　2017「浮島沼西岸・沖田遺跡の調査からみた湖沼利用の推移」『富士山かぐや姫ミュージアム館報』第 32 号

松尾 昌彦　2002『古墳時代東国政治史論』雄山閣

山梨県教育委員会　1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』

山梨県教育委員会　1988『稲荷塚古墳』

山梨県教育委員会　2000『平林 2 号墳』

挿図出典

図 1・2：塩入 1993、末木 2005、東海古墳文化研究会編 2006、東北・関東前方後円墳研究会編 2017 のデータをもとに作成。

図 3：加藤学園考古学研究所 1976、富士市教育委員会 2013、山梨県教育委員会 1987・1988・2000 の各掲載図を一部改変して作成。

（筑波大学人文社会系）